

「中国古典」は私のメンター

三村邦久

● 藁にもすがる思い

私は27歳でメーカーから経営コンサルタント会社に転職し39歳で独立しました。紆余曲折、七転八倒して62歳の今日に至りますが、特に厳しかったのが2008年のリーマンショックの時でした。多くの会社が厳しい状態に追い込まれその余波で私の仕事も激減し、自分の力不足を痛感すると同時に、ビジネスモデルや自分のマインドもリセットを迫られました。

何をどう考えどうするべきか、正しく藁にもすがる思いでした。色んな本を読んだり、セミナーに参加したりしましたが活路が見出せず苦しい時期が続きました。そんな時偶然テレビで東洋思想研究家である田口佳史先生の「論語の一言」という本が紹介され、知人からも田口先生の講座があることを教えて貰い、早速講座に参加しました。

● 中国古典の力

論語には「これを知る者はこれを好む者に如かず、これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」という一節があります。知識が多い物知りは大したことはなく、好きなことに楽しく取り組む者こそ最強である。人の真似ではなく自分らしく、義務感ではなく好きで楽しいことに没頭すれば間違いなく良い結果が得られる。

老子には「足るを知る者は富む」という有名な一節があります。自分には才能がない、環境に恵まれないなどと、ない物ねだりをして豊かにはなれない。自分の持てるものを最大限に活かしてこそ豊かになれる。

孫子の兵法には「上下欲を同じうする者は勝つ」という一節があります。人の上に立つ者の心得として、自分の願望だけでなく、部下や後輩の利益や願望を

初めて参加したのは「老子講座」で、そこで最初に学んだのが「素を見(あらわ)し、樸(ぼく)を抱く」という一節で、頭にガツンと一撃、強烈な言葉でした。樸(ぼく・あらき)とは山から切り出したばかりの丸太のことで、家の柱でも家具でも何にでも変化する無限の可能性を秘めています。我々が価値ありと考える完成品は実は伸び代はない。つまり、荒削りでも持ち味を生かした可能性にこそ価値があるということです。

自分を振り返ってみると自分を立派に見せようという考えに囚われ、空回りしていることに気づかされました。過去でなく未来の可能性に焦点を当てれば良いのだと思うと、人からの評価されたいという呪縛から解放され、目の前がパッと明るくなりました。暗雲立ちこめる私の心に一筋の光明が差したのです。

叶えるようにすると物事は上手くいく。一方的な命令によって部下がやらされ感を募らせるのではなく、メリットを感じれば一体感も出来るし、自発的に動いてアイデアも出て生産性がグッと上がるのです。

「なるほど!」。こんな為になる中国古典なら、骨の髄まで染み込ませるようにと学び続けました。そうすると自分の考えは間違っていない、疾(やま)しいことは一切無い、迷うことなく胸を張って仕事が出来ようになってきました。

中国古典は人間や社会の本質を簡潔に深く突いており、仕事に役立つ要素が満載なのです。日本の歴史を振り返ると、幕末から明治維新への激動期を乗り越え今日の日本の礎を築いた幕末の志士たちは、幼少期より四書五経といった中国古典を学んでいたこともその力の大きさを証明しています。

●本を読んでもイマイチ分からない

私は経営コンサルタントという職業柄、30歳代から論語や孫子の兵法の本を買って読んでいました。しかし、自分の未熟さから行間を読み取ることも出来ず、何度も頓挫していました。

中国古典は、礼儀や道徳を強調し堅苦しい、漢文は難しいというネガティブなイメージも強いと思います。特に初めて学ぶ人は漢文の言い回しに慣れてい

ないこともあります。本格的な本は難解で要約本は表面的で、帯に短し襷に長しの状態なのです。

ところが、田口先生の講座で先生の実体験や世の中の出来事と関連づけてお話を伺うと体にスッと入って来ました。私の体が古典の内容を欲していたこともあるでしょうが、肉声で学ぶことで何倍も理解が進むと感じました。

●不安や迷いの解消に貢献したい

私のように自分の拠り所を求め、心を強くするヒントを求めている人が大勢おられると思います。自分の決断や行動に自信が持てず、不安や迷い抱えながら恐る恐るリーダーシップを取っている人も少なくないと思います。

しかし、企業内の教育は業務に直結した知識とスキルの習得に偏っています。人間性や人格の醸成が大切なことはわかっている、学ぶためのツールもなく個々人の資質に依存しているのが現状です。

そんな問題を少しでも解決したいと、i·PLACEでは10分の動画で仕事に役立つ中国古典のフレーズ

を取り上げ、その意味と仕事にどう活かすかを解説していくことにしました。専門家から見れば拙い内容かもしれませんが、一人でも多くの人が中国古典に親しむきっかけになればと思います。また通勤時間や業務の隙間時間など、いつでもどこでも学べるようオンライン化を図りました。

i·PLACEでは中国古典に加え、書籍ダイジェストの配信サービス「SERENDIP」、更にコミュニケーション、論理思考、問題解決、持ち味活用、戦略思考など仕事の基礎を固める内容も加えました。

●中国古典はWell-being(持続的幸福)の指南書

中国古典を学び続けることで最近わかってきたことは、中国古典の根底にはWell-being(幸福)の哲学が流れているということです。論語の冒頭文の「学びて時に之を習う。亦説(よろこ)ばしからずや。朋有り(ともあり)、遠方より来る。亦樂しからずや。人知らずして慍(いきど)おらず、亦君子ならずや。」この一節は、学び成長する喜び、同志と語らう楽しさ、移ろいやすい人の評価に右往左往しない泰然自若とした立派な人物の有り様を示しています。

人間性(徳)を高め立派な人間を目指すことで、い

い人間関係を作り、いい仕事、いい人生を手に入れることができる。そして仲間の幸福や笑顔のために働くからこそ、素晴らしいリーダーシップが発揮できる。こんな幸福を追求する思想哲学であるからこそ、2000年を超える永い年月を経ても読み続けられているのでしょう。

我々の背中を押し勇気をくれるメンターである中国古典を活用し、一人でも多くの人が胸を張って堂々と仕事に取り組めるようになればこんな嬉しいことはありません。